

国語研の窓

19号

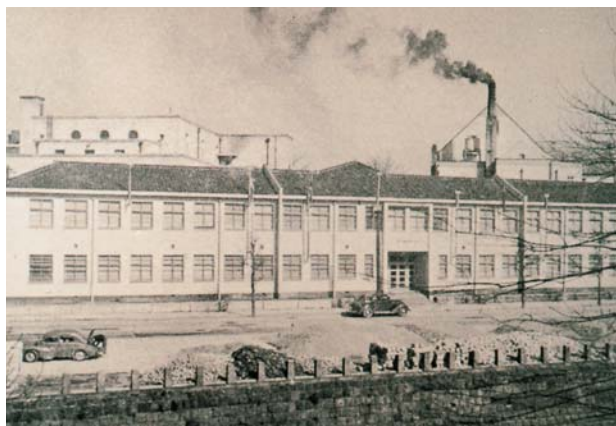
平成16年4月1日 第19号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会

〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14

電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530

URL <http://www.kokken.go.jp/>



昭和29年10月～昭和37年3月：旧一ツ橋庁舎

もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：日本語教育短期研修 2
- 新「ことば」シリーズ 17号 4
- 第19回「ことば」フォーラム報告 5
- ことばQ&A 6
- お願い：雑誌『太陽』の著作権調査 6
- 表紙のことば 7
- 国際シンポジウムのお知らせ 7
- 新刊 7
- お知らせ：
「ことば」フォーラム、「ことばビデオ」シリーズ 8

暮らしに 生きる ことば

問題解決のコミュニケーション

保育園児の自由遊びを観察していると、おもちゃをめぐる「これ貸して。」「だめ!」というようなやりとりをよく見かけます。最近の発達心理学の研究により、このような自分の要求と他者の要求の対立による葛藤は、子供のコミュニケーション方略の発達を促す契機になることが明らかになってきました。

自分と他者の要求が対立するという問題場面に会った時のコミュニケーション方略は、次のように発達していくこともわかってきました。2歳児は、初めは相手に対して、叩く、蹴るなどの攻撃をしたり、「嫌い」「アカンベー」などと非難することが多いのですが、次第にそのような攻撃や非難は減少し、言葉で自分の要求を表現するようになっていきます。3・4歳児になると、おもちゃを借りたい方は、はっきりと「貸して」「ちょうだい」という依頼をしたり、代わりのおもちゃを提示するなどの取引をしようとし、おもちゃを使用している方は、「だめ」「～

するな」という拒否や自分がそのおもちゃを使用中であるという現状説明をするようになります。

5・6歳児になると、さらに相手の意向を考慮した上で自分の主張やその理由を説明したり、相手の特性に応じて異なるコミュニケーション方略を使い分けることができるようになります。そして、児童期・青年期を通じて、自分と他者の両方の利益に配慮し、他者との関係も視野に入れながら、問題を解決するためのコミュニケーションを行うことができるようになっていくのです。

近年、職場などでの会話の研究により、認識のずれや意見の衝突が生じた際には、文脈や相手の認識を考慮しながら、質問や説明、意見の表明を行って、相互の認識のずれを修復し共通理解を形成しようとすることが明らかになってきました。しかし、同時に、地位、性別などがコミュニケーションに影響を与え、双方の意見が同等に尊重されないことがあるということも報告されています。問題解決場面においてより良い解決法を探るためには、お互いの考えを尊重しながら建設的にコミュニケーションを行っていくことが大切でしょう。(杉本 明子)

日本語教育短期研修

●「日本語教育短期研修」とは

日本語教育部門では、現職の日本語教師及び日本語教育に関心をお持ちの方のために、「日本語教育短期研修」という短期集中型の研修会を、平成13年度より定期的に開催しています（短期研修に関する詳細は、ホームページ <http://www.kokken.go.jp/jsl> の「短期研修」の欄で見ることができます）。

研修の会場は主に国立国語研究所ですが、神戸・札幌・福岡・金沢・仙台といった東京以外の地域でも研修を開催し、年間500人以上の方が参加されています。

研修には大きく分けて、「講演」を中心とするものと「グループ・ディスカッション」を中心とするものがあります。

講演を中心とする研修では、日本語教育及び日本語教育の関連分野における最新の研究成果が、分かりやすく解説されます。また、その一部は『日本語教育ブックレット』（実費500円で配布）としてまとめられています（ブックレットに関する詳細は、上記ホームページの「日本語教育ブックレット」の欄で見ることができます）。

また、グループ・ディスカッションを中心とする研修では、現職の日本語教師が教育現場で体験する様々な問題を持ち寄り、互いに情報や意見の交換を行います。

講演とグループ・ディスカッションを組み合わせることもしばしばですが、どの形式の研修であれ、



日本語教育ブックレット

研修の目的は「多様な学習者、新たな学習ニーズに対応できる力の育成」ということにあります。企画に際しても、研修が、単なる情報の提供の場としてではなく、「日本語教師が現実抱えている問題について、教師が自ら考え、そして自ら問題解決の糸口をつかむ」ことができるような場として機能するように工夫しています。

●「日本語教育短期研修」の内容

これまで短期研修でとりあげたテーマを、内容別に分類すると、以下のとおりになります。

I：「学習者」に焦点をあてたもの

「多言語環境にある子どもの言語能力の評価」
(平成13年度)

「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」
(平成14年度)

「地域の日本語教育と視聴覚教材」(〃)

「多言語環境下の子どもの言語発達・言語学習」
(平成15年度)

「日本語学習をとらえなおす」(〃)

II：「作文教育」に関するもの

「コンピュータと作文添削」(平成13年度)

「日本語教育とコンピュータ：
コンピュータによる自由作文の自動評価システム」
(平成14年度)

「論理的文章作成能力の育成に向けて」
(〃)

「作文教育における、日本語教師と大学専門教員との協力のために」
(平成15年度)

III：日本語教育の関連分野に関するもの

「日本語教材と著作権」(平成13年度)

「対照研究と日本語教育」(〃)

「日本語教育と心理学」(〃)

「対照研究の成果を日本語教育に生かすために」
(平成14年度)

「日本語教育における文法の役割」(平成15年度)

「ひろげる・つなぐ 漢字教育の工夫」
(〃)



グループ・ディスカッションの様子

●研究プロジェクトとのかかわり (1)

短期研修のテーマとして「学習者」「作文教育」がまとまった形で取り上げられているのは、これらのテーマが、日本語教育部門で現在行っているプロジェクトの内容と密接にかかわるものだからです。

まず、Ⅰの「学習者」に焦点をあてた研修は、主に日本語教育部門で行っている研究プロジェクト「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」の内容に関係するものです。

日本語を勉強する人の数は、1980年代以降、急速な勢いで増大しました。また、学習者の年齢、背景とする文化、日本語学習の目的などにおいても、かなりの多様化が進み、効率性のみを追求する教育や、従来型の一斉授業の枠組みでは対応できないような状況がいろいろなところで生じています。

このように、「多様化」は近年の日本語教育における重要なキーワードですが、「実際に何がどう多様なのか」「多様であることにどう対応すべきなのか」など、「多様化」というキーワードを理解し、教育活動に生かすためには、学習者は教室で、そして教室以外の日常生活の中でどのように日本語を学習しているのか、その実態を把握することが必要です。

「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」プロジェクトでは、そのような問題意識にもとづき、学習者や教師が身の回りのどのような素材を日本語学習の材料として、意識的・無意識的に活用しているかを調査しています。

短期研修では、「多言語環境にある子ども」「地域の日本語教育」といったケースを取り上げ、プロジェクトの研究成果もふまえながら、「教師や地域の人々は学習者の日本語学習をどのように支援することが

できるのか」という問題について、参加者と一緒に考えました。

●研究プロジェクトとのかかわり (2)

Ⅱの「作文教育」に関する研修も、日本語教育部門の研究プロジェクト「日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究：日本語学習者による日本語作文データベース」に関連するものです。

本プロジェクトでは、日本語学習者に対する作文教育を改善するための基礎資料として、「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」を作成しています。また、それと並行して、コンピュータを用いて作文教育を支援するためのツールの開発も手がけており、現在までに、

- ・XML による作文論理構造表示システム
- ・XML による添削情報表示システム

という二つのツールを作成しています。

さらに、インターネットを通じて作文の添削を行い、それを資料として収集する、

・Web-DB 連携による作文・添削収集システムの開発も進めています。「作文教育」に関する短期研修では、まず上記のデータベースやツールについて紹介するとともに、その活用について、様々な角度から議論を行いました。

また、大学等の高等教育機関で学ぶ留学生の文章作成能力の向上ということが今後ますます重要な課題になるであろうという見通しのもと、「論理的な文章とは何か」、「文章作成指導における日本語教員と専門科目の教員の役割とは何か」という問題についても考えました。

このように、国立国語研究所の「日本語教育短期研修」は、日本語教育にかかわる方々に様々な問題について考えていただく場であると同時に、研究所で行っている研究プロジェクトの研究成果を広く世の中に紹介する場でもあります。そして、日本語教育にかかわる方々との交流を通じて、研究の次の一步を考える貴重な機会となっています。

「日本語教育短期研修」の電子メールによる案内を希望される方は、tanken@kokken.go.jp まで御連絡ください。

(井上 優)

新「ことば」シリーズ 17 号 ことばの「正しさ」とは何か

国立印刷局／473円(税込み)

●今号のテーマについて

「正しい日本語を使おう」「あのことば遣いは間違っている」という言い方をよく耳にします。しかし、ことばについて「正しい」とはどういうことか、きちんと決めることはなかなか難しい問題です。

今回刊行する新「ことば」シリーズ17号では、「ことばの『正しさ』とは何か」というテーマを取り上げ、様々な観点から解説と考察を加えました。

●今号の内容

新「ことば」シリーズは、主として「座談会」「解説」「問答」という三つの部分からなっています。

座談会

「座談会」では、ことばの「正しさ」「適切さ」ということと日々向き合いながら仕事をされている方を3名お招きし、お話を伺いました。

お一人目の倉島節尚さんは、長年国語辞典の編集に関わってこられた方、お二人目の佐竹秀雄さんは、現代における表記や文章、ことば遣い等に関して分析をしてこられた方です。そして三人目の早野恵子さんは、「医療コミュニケーション」を専門とされているお医者様。患者さんから必要な情報を効率的に、かつ威圧感を与えないようにして上手に引き出すにはどうしたらいいか、日夜苦心なさっています。

座談会では、いま何が「適切」なことば遣いなのか、場面や話し相手のことを考慮しながら「その場で考えていく」ことの重要性が強調されました。現実場面での興味深い実例を交えながら話は進み、最後に、「日常生活の中で、ことばの『正しさ』というものとどう付き合っていくとよいか」、について、出席者の皆さんから提言が行われました。

解説

「解説」では、ことばの「正しさ」について、所内外の5名の執筆者が、異なる視点から説明を加えています（以下、所外執筆者のみお名前を挙げました）。

解説1「ことばの『正しさ』とは何か」では、ことばの「本質」という視点から論じています。突き詰めて考えてみると、ことばの「正しさ」に絶対的な根拠はありません。しかし社会生活を円満に送るための約束事として、「正しさ」をきちんと決めておく必要が出てくるのだ、ということを述べています。

解説2「地域差・世代差・ことばの『正しさ』

は、屋名池誠さんに執筆をお願いしました。ことばの「正しさ」に対する考え方は、地域によっても世代によっても違います。自分だけをものさしにして「正しい・正しくない」の判断を行うことは不適当なのではないか、ということが述べられています。

ことばの「使い方」の適切さについて論じたのが解説3「日常生活でのことばの正しさ」です。例えばいきなり「百万円お貸し願えませんか」と言うことは、ことばの形としては正しく丁寧なものであるけれど、「頼み方」としては不適切と言えます。ことばの形だけではなく、その「使い方」についても配慮しよう、ということと呼びかけています。

解説4「教育現場で考えることばの正しさ」は、文字通り「教育」という視点からことばの正しさについて問い直しています。教育という場面では、ことばの「正しさ」を伝えることが強く意識されがちです。しかしそれだけでなく、「正しさ」にまつわる様々な問題についてきちんと考えることこそが言語教育では重要である、ということを述べています。

最後の解説5は、西江雅之さんに執筆をお願いしました。題目は『『文法書』のない世界での『正しさ』とは』。日本に暮らしていると、ことばの「正しさ」というものが、辞書や文法書の中にあるかのように思ってしまうがちです。しかし世界の大多数を占める無文字言語においては、そのような意味での「正しさ」というものは存在せず、ただ実際の脈絡に「そぐう」ことばであるかどうか、ということだけが重要となります。無文字世界の事情について知ることで、日本語の「正しさ」についても、いつもとは異なる視点から考え直してみることができると思います。

問答

このほか、ことばの「正しさ」について、日常生活の中で問題となりそうなトピックを18題取り上げ、質問応答方式で解説を加えました。

これらの記事によって、単に「何が正しいのか」ということを確認するだけでなく、そもそもことばの「正しさ」とは何か、という根本的なところを、改めて考えていただければ幸いです。

※近日刊行予定 お近くの書店に御注文ください。

(新「ことば」シリーズ部会)

第19回「ことばを探す—^{こい}語彙の世界に遊ぶ—」

第19回「ことば」フォーラムは、2月21日（土）国語研究所講堂で開催されました。当日は冬としては穏やかな日和に恵まれ、201名の参加者をお迎えすることができました。

今回の「ことば」フォーラムは、国語研究所が今年1月末に刊行した『分類語彙表一増補改訂版一』の紹介も兼ねて、日本語の語彙の広がりや特徴について、身近な例をもとに考えるという主旨で行いました。なお、今回は、北区教育委員会との共催で、『分類語彙表』の出版元である大日本図書株式会社からの協賛を頂きました。

第1部では、以下の三つの講演を行いました。

●「語彙の世界とは」（国立国語研究所員・山崎誠）

山崎は、語の集まりである「語彙」という考え方を紹介しました。特に一つ一つの語が他の語と意味的な関係を持ったまとまりである「語彙体系」について、親族語彙などを例として説明しました。さらに語彙体系の特徴として、固定的なものでなく流動的であること、生活様式によって影響を受けるため個人差があること、科学的な側面よりも人間的な側面を重視する体系であることの3点を指摘しました。

●「言葉に遊ぶ」（作家・^{こうづかんな}神津十月）

神津氏は、御自身の言語形成に影響を与えた人物として祖父・中村正常氏（ナンセンス文学の作家）と無着成恭氏とのお二人を挙げて幾つかのエピソードを紹介されました。「鬼を見たこともないのに『鬼のように怖い』などという言い方をするな」。正常氏はこのような接し方で、手あかの付いた決まり文句を避け、自分の言葉で表現することの大切さを教えてくれたと言います。

また、神津氏は、世代による語彙の違いを挙げ、若年層の語彙が貧弱になっているのではないかと、いうことを指摘しました。例えば、子供が親に「怒られる」「しかられる」という場面では、かつては、「お目玉を食らう」「雷を落とされる」「お小言^{こご}を食らう」「説教される」「諭される」など、状況に応じた使い分けがあり、その言葉を聞いただけで、どの程度のことでどのくらい怒られたのか、場面が想像できたが、若い世代は状況にかかわらず「怒られる」という一つの言葉だけで済ますようになって、もっと的確な言い方があるのにそれが使えなくなってきたことへの憂慮を示しました。

●「分類語彙表とは」（京都橘女子大学客員教授・宮島達夫）

宮島氏は、『分類語彙表一増補改訂版一』の刊行に当たり、原編者の林大氏とともに、^{へんさん}編纂の中心的役割を担ったお一人です。宮島氏は、五十音順の辞書と違い、意味によって分類・配列されている「シソーラス」（類義語集）の利点を説明しました。

また、『分類語彙表』以外にも、近代的なシソーラスの元祖とも言える、イギリス人P. M. ロジェによるシソーラスや日本で出版された類語辞典を挙げ、それらの特徴を紹介しました。



第2部のパネルディスカッションでは、会場からの質問票による質問や意見をもとに、3人の講演者が語彙をめぐる話題について話し合いました。

会場からは、「辞書のことをなぜ『字引』と言うのか」「語彙を増やすにはどうしたらいいか」「日本語で一番好きな言葉は」など幅広い質問が寄せられました。

神津氏は、語彙を増やすための一つの方法として、古くから伝わる言葉の豊かさを再認識することを提案されました。そして、「松杉を植える（＝そこに骨をうずめる）」「かげのぞきもしない（＝ちっとも顔を見せない）」など味わいのある江戸語を紹介されました。

なお、今回のフォーラムでは、講演者が話した言葉をほぼ同時に漢字仮名交じりの文章にして会場の画面上に映し出す同時字幕システムを導入しました。結果は良好で来場の皆様から多くの好評を得ることができました。

（山崎 誠）

「フォーラム」とは「広場」という意味の外来語ですが、国語研究所では参加者の方々と一緒に言葉について考えたり話し合ったりする機会を「ことばフォーラム」と名付けて、開催しています。

ことばQ&A

質問 日本語を勉強している知り合いの外国人が、『主人』は差別的な言葉だ。」と言うのですが、これはどういうことですか。

回答 「主人」に「一家の中心」や「使用人が仕える対象」という意味があることを知り、そんな言葉は使いたくない、と思う外国人は少なくありません。特に男女の区別を職業名などから排除する動きの強い国から来た人はこの言葉に驚くようです。

日本では、平成11年に男女共同参画社会基本法が公布・施行されました。その後、男女が互いを尊重し性別にかかわらず個性・能力を発揮できる社会を作るため、様々な取組がなされています。その一つに、性別を限定する職業名や性別による優劣を連想させる表現などをほかの言葉で言い換える動きがあります。例えば、「看護婦・看護師」を「看護師」に、「サラリーマン、OL」を「会社員」に、「女医」を「医師」に、「主人」を「夫」に、などです。「看護婦・看護師」は、平成14年に法律によって正式に「看護師」に改められました。しかし、日常生活の中では「看護婦」を使う人がまだ多いようです。

今まで慣れ親しんできた言葉をほかの言葉に置き換えるのはそうたやすいことではありません。特に

「主人」や「御主人」といった言葉は身近な人間を指す言葉ですし、個人的話題の中で使われることが多いため、ほかの言葉への置き換えは余り進んでいません。

配偶者を表す中立的な言葉としては、「夫、妻、つれあい、パートナー」が挙げられますが、特に迷うのは、相手方の配偶者について触れる時です。「御主人、奥さん」の代わりに「おつれあい（さま）」という言葉を使う人もいますが、まだまだ少数派です。

今の時代に、主従関係を意識して「主人」を使っている人などいないのだから、「主人」を使えばいいと考える人もいます。しかし、何げなく使っている言葉が、性別による固定的な役割意識や、優劣のイメージを醸成するおそれがあるのだということは知っておく必要はあるでしょう。個人が「主人」を使うかどうかはその人の判断に任されることですが、最近では、窓口などで「御主人」を使うことに対し、職員に注意を促している自治体も出てきています。これは、男女共同参画社会作りのための努力が言葉の使用においても少しずつ広がっていることのあらわれであり、こういった変化は今後、私たち個人の言葉の選択にも次第に影響を与えていくでしょう。

(金田 智子)

— おわびと訂正 —

本紙18号の「ことばQ&A」欄の回答中、小学校学習指導要領の「平成10年版では方言や共通語という表現自体がなくなっています」とありますが、平成10年版でも第5学年及び第6学年の〔言語事項〕の言葉遣いに関する事項の中に「共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと」という内容が残されています。おわびして訂正いたします。

●博文館刊行『太陽』に収録された記事の著作権者の方（連絡先）を探しています

国立国語研究所では、博文館から刊行された総合雑誌『太陽』（1895年～1928年）を対象とした、日本語の資料集「太陽コーパス」を作成し、公開することを予定しています。「コーパス」とは、大量の言語資料という意味で、『太陽』の1895年、1901年、1909年、1917年、1925年の5年分全文から、自在に言葉を取り出して研究することができるようにしたものが「太陽コーパス」です（「太陽コーパス」の紹介記事は、本紙11号を御覧ください）。

この企画は、現代語が確立した時期（19世紀末期～20世紀初期）の日本語について、学術的な研究資料を整え、現代日本語の在り方について提言を行っていく基盤を作ることを、目的としています。その実現のためには、雑誌『太陽』に収録された記事の著者の方々、又はその著作権を継承されている方々に、御承諾を頂く必要があります。国語研究所では、著者や著作権継承者の方々の連絡先を調べ、御承諾を頂けるようお願いをしておりますが、現在までのところ、300人以上の方々について、著作権者の連絡先や、継承者のお名前・連絡先が判明していません。

そこで、国語研究所ホームページ（<http://www.kokken.go.jp/>）に「雑誌『太陽』の著作権調査」のページを設け、著作権者の連絡先等につき情報の提供を呼びかけています。ひとりでも多くの著作権者の方と御連絡を取りたいと願っておりますので、お心当たりのある方は是非御一報ください。（田中 牧郎）

表紙のことば

国立国語研究所は、来年1月、東京都立川市に移転することになっています。現在の北区西が丘で仕事を始めたのは昭和37年4月のことです。それまでは昭和23年12月20日の創立以来、何度か移転を重ねていました。

創立当初は、明治神宮聖徳記念絵画館（新宿区霞ヶ丘）の一部を借用して仕事をしていました。仕事が進むにつれ手狭になったため、昭和26年12月からは分室として、三鷹市の旧山本有三邸（現・三鷹市山本有三記念館）や新宿区立四谷第六小学校の一部を借用していました。再び一つ所で仕事をするできるようになったのは、昭和29年10月に千代田区神田一ツ橋に移ってからです。

国語研究所では、創立以来、実際の話し言葉を録音してデータとしたり、新聞や雑誌から用例を大量に集めて分析したり、統計的手法を取り入れたりして、現代語研究という領域を開拓していきました。

石造りの絵画館は冬の寒さが身にこたえたそうですが、一ツ橋時代も冬は石炭ストーブ、夏は扇風機で、用例を記したカードが風に飛ばされないよう苦労したそうです。その用例カードも、今ならパソコンなどを利用して入力するところでしょうが、当時は手書きや邦文タイプを利用していました。また、資料などもガリ版を切って刷っていたそうです。

ところで、松本清張の小説『砂の器』には国語研究所が登場します。最近、新たにテレビドラマ化されたので御存じの方もいらっしゃるでしょう。

物語は殺人事件から始まります。刑事の今西は、目撃証言で得た東北弁と「カメダ」という言葉を手がかりに、秋田県亀田を訪ねますが成果を挙げることができません。そこで、国語研究所を訪ね、出雲の音韻が東北方言のものに似ていることを知り、島根に亀嵩（カメダケ）という地名を発見するのです。

先ごろ放送されたドラマでは、現庁舎が撮影に使われました。昭和49年に映画化されたときは、現在地に建っていた旧庁舎での撮影でした。

さて、原作では次のようにあります。「今西栄太郎は、都電で一ツ橋に降りた。暑い盛りを濠端の方に歩くと、古びた白い建物があった。小さな建物である。「国立国語研究所」の看板がかかっている。」

原作が書かれたのは昭和35年。研究所は当時、神田一ツ橋の一橋大学所有の建物を借用していました（現在は学術総合センターが建っています）。

西が丘の庁舎は新旧ともに映像に残りましたが、一ツ橋庁舎はどうだったのでしょうか。——原作は昭和37年にもテレビ化されています。そのときに写ったのを見た覚えが……という話もあるのですが。

*引用は新潮文庫によりました。（池田 理恵子）

国際シンポジウムのお知らせ

国立国語研究所では、創立60周年を迎えた日本語学会（平成16年に国語学会から改称）との共催で、上記の国際シンポジウムを開催します。

日本語の研究というと、とかく日本国内の研究だけに目が向きがちですが、実際には世界各地で様々な日本語の研究が進められています。

今回のシンポジウムは、第一線で活躍しておられる研究者の方々をお招きし、海外で進められている日本語研究の内容や位置づけについてお話しいただいて、日本語研究の新たな発展の方向性について考えようとするものです。

お問い合わせ先：井上 優（日本語教育部門）

電子メール：mainoue@kokken.go.jp

「世界の日本語研究の新たな発展を求めて」

日時：2004年5月22日（土） 13：45～17：30

場所：日野市民会館（東京都日野市）

講演者：

ジュニー・トマス（イギリス、ウェールズ大学）
イレーヌ・タンバ（フランス、東洋言語研究所）
アンドレイ・ベケシュ（スロベニア、リュブリアナ大学）
アン ピョンホ（韓国、誠信女子大学）

コメンテーター：

矢澤 真人（筑波大学）
宇佐美 まゆみ（東京外国語大学）
井上 優（国立国語研究所）

新 刊

全国方言談話データベース

『日本のふるさとことば集成—第15巻 広島・山口—』（国立国語研究所資料集 13—15）

2004年3月／国書刊行会／冊子（A5判横組み284ページ）、CD、CD-ROM／7,140円（税込み）

第20回「ことば」フォーラムのお知らせ

テーマ：「ことばビデオ」方言の旅ー庄内方言の集いー

日 時：2004年5月29日(土) 13:30～15:30

ことばビデオ『方言の旅』の上映と座談会

佐藤亮一氏（東京女子大学）

佐藤武夫氏（庄内方言研究家）

富永 一氏（「方言の旅」製作監督）

原田佳奈氏（「方言の旅」主演俳優）

大西拓一郎（国立国語研究所）

場 所：山形県三川町公民館（東田川郡三川町横山）

鶴岡駅——バス15分(酒田行き)

庄内空港——車 10分——三川町役場前下車



今年3月に完成した国立国語研究所「ことばビデオ」シリーズ3『方言の旅』は、庄内方言を例として紹介しながら、日本の方言に関する理解を深める内容となっています。

制作に当たっては、山形県三川町の多くの方々に出演・協力していただきました。今回のフォーラムは地元の方々に感謝の意味を込めつつ、本ビデオの教育的利用の促進を目指して開催するものです。たくさんの方の御参加をお待ちしています。

◆詳しくは、ポスター・ちらし・研究所のホームページ（<http://www.kokken.go.jp>）を御覧ください。

◆お問い合わせ先：〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14 国立国語研究所

電話：03-3900-3111(代表) 電子メール：forum@kokken.go.jp

◆今年度の「ことば」フォーラムの予定について

- ・8月28日(土)，東京ウィメンズプラザ（東京都渋谷区神宮前）——「外来語と暮らし」（仮題）
- ・秋ごろ，武庫川女子大学（兵庫県西宮市）——「外来語と暮らし」（仮題）
- ・12月18日(土)，国立国語研究所講堂——「国立国語研究所50年の実績ー西が丘での歩みー」（仮題）
- ・上記のほか，埼玉県内での開催も計画しています。

「ことばビデオ」シリーズ〈豊かな言語生活をめざして〉3 『方言の旅』

VHS 52分／対象は中学生以上，解説書48ページ付き，2004年3月刊行

身近な話し言葉「方言」について，生活や学校で使われている様子，また国立国語研究所の研究成果を交えて描いています。全体は，2話で構成されています。

第1話「方言と出会う」は，主人公の大学生が実際の方言に出会い，地元の方々と交流する場面を中心に，第2話「方言を考える」は，主人公が方言に対する考察を深める場面を中心に描いています。ロケ地は，山形県三川町です。

「ことばビデオ」シリーズは，各都道府県の教育委員会を通じて，地域の視聴覚ライブラリー等に配布されています。購入については，東京シネ・ビデオ株式会社（〒103-0022 東京都中央区日本橋室町1-8-8 電話03-3242-3151 FAX 03-3242-3182 <http://www.tokyocine-video.co.jp/>）までお問い合わせください。定価は15,750円(税込み)です。

なお，平成16年度のテーマは「あいまいな表現」を予定しています。

